

お手紙

アノルカロロベル き、機
きたくやく

① がまくんは、げんかんの前に すわっていました。

② かえるくんがやって来て、言いました。

「どうしたんだい、がまがえるくん。きみ、かなし
そうだね。」

「うん、そうなんだ。」

がまくんが言いました。

「今、一日のうちの かなしい時なんだ。つまり、
お手紙をまつ時間なんだ。そうになると、いつもぼく、
とても ふしあわせな気持ちに なるんだよ。」

「そりゃ、どういわけ。」

かえるくんがたずねました。

「だって、ぼく、お手紙 もらった
こと ないんだもの。」

がまくんが言いました。

「いちどもかい。」



かえるくんがたずねました。

「ああ、いちども。」

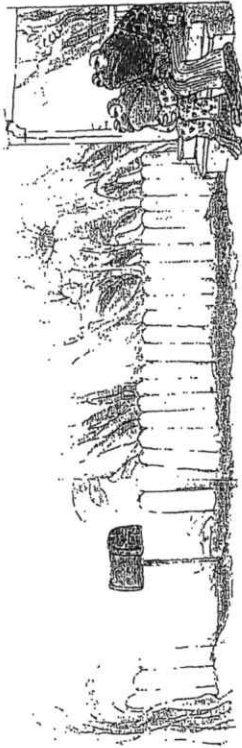
がまくんが言いました。

「だれも、ぼくに お手紙なんか
くれたことがないんだ。毎日、
ぼくのゆうびんうけは、空っぽさ。」

お手紙を まっているときに
かなしいのは、そのためなのさ。」

③ ふたりとも、かなしい気分て、

げんかんの前に こしを下ろして
いました。



④ すると、かえるくんが言いました。

「ぼく、もう 家へ帰らなくっちゃ、

がまくん。しなくちやいけない
ことが、あるんだ。」

⑤ かえるくんは、大いそぎで 家へ

帰りました。えんぴつと紙を見つけ

ました。紙に何か書きました。紙を

ふうとうに入れました。ふうとうに こう書きました。

「がまがえるくんへ」

⑥ かえるくんは、家からとび出しました。知り合いの

かたつむりくんに会いました。

「かたつむりくん。」

がえるくんが言いました。

「おねがいで、このお手紙を

がまくんの家へ もって行って、

ゆうびんうけに 入れてきてくれ

ないかい。」

「まかせてくれよ。」

かたつむりくんが言いました。

「すぐやるぜ。」

⑦ それから、かえるくんは、がま

くんの家へもどりました。



⑧ がまくんは、ベッドで お昼ねを

していました。

「がまくん。」

かえるくんが言いました。

「きみ、おきてさ、お手紙が来るの
を、もうちよっと まつてみたら
いいと思うな。」

「いやだよ。」

がまくんが言いました。

「ぼく、もう まっているの、あき

あきしたよ。」



⑨ かえるくんは、まどからゆうびん

うけを見ました。かたつむりくんは、

まだ やって来ません。

「がまくん。」

かえるくんが言いました。

「ひよつとして、だれかが、きみに

お手紙を くれるかもしれない

だろう。」

「そんなこと、あるものかい。」

がまくんが言いました。

「ぼくに お手紙をくれる人なんて、

いるとは思えないよ。」

⑩ かえるくんは、まどから のぞきました。

⑪ かたつむりくんは、まだ やって来ません。

「でもね、がまくん。」

かえるくんが言いました。

「きょうは、だれかが、きみに お手紙 くれるかも

しれないよ。」

「ばからしいこと、言うなよ。」

がまくんが言いました。

「今まで、だれも、お手紙 くれなかったんだぜ。

きょうだって同じだろうよ。」



⑫ かえるくんは、まどから のぞきました。

⑬ かたつむりくんは、まだ やって来ません。

「かえるくん、どうして、きみ、ずっと まどの外を
見ているの。」

がまくんがたずねました。

「だって、今、ぼく、お手紙をまっているんだもの。」

かえるくんが言いました。

「でも、来やしないよ。」

がまくんが言いました。

「きつと来るよ。」

かえるくんが言いました。

「だって、ぼくが、きみに

お手紙出したんだもの。」

「きみが。」

がまくんが言いました。

「お手紙に、なんて書いたの。」

⑭ かえるくんが言いました。

「ぼくは、こう書いたんだ。

『親愛なる がまがえるくん。ぼくは、きみが

ぼくの親友であることを、うれしく思っています。

きみの親友、かえる。』

「ああ。」



がまくんが言いました。

「とても いいお手紙だ。」

⑮ それから、ふたりは、げんかんに
出て、お手紙の来るのを まって
いました。

⑯ ふたりとも、とても しあわせな
気持ちで、そこにすわっていました。

⑰ 長いこと、まっていました。

⑱ 四日たって、かたつむりくんが、
がまくんの家につきました。

⑲ そして、かえるくんからのお手紙

を、がまくんに わたしました。

⑳ お手紙をもらって、がまくんは、
とても よろこびました。

